

# 商店力 竹のいえ 鹿児島県鹿児島郡三島村竹島

## 20年間商店がなかった島に豊富な品揃えの雑貨店が誕生した

スーパーもコンビニも飲食店もなかった人口70人の島に、小さな商店ができた。およそ400点の食料品や雑貨、土産品のほかに、店主が揃ってきた魚も販売しているというユニークな店だ。



1 竹のいえのオープン当日。開店時間前から店の前には長い列ができあがっていた。2 竹のいえの入り口。ハイビスカスの花が南国を感じさせる。

今春、東シナ海に浮かぶ鹿児島島の竹島に、約20年ぶりとなる商店「竹のいえ」が開店した。立ち上げたのは、この島で生まれ育った山崎晋作さん。高校進学で島を離れ、都内や鹿児島市のコンピューター会社などに

勤めていたが、妻の真子さんと結婚を機に2014年(平成26)、島で子育てをするため故郷にUターンした。人口が減り続けている竹島の将来を心配し、「人々が集まる島」をつくる取り組みとして始めたのが、実家を改装し、商店を復活させたことだ。

「こちらに戻ってきて切実だったのが、収入の柱が必要なことでした。それで、活用されていない実家の使い道と、島に必要なものを考えたら、これは商店を開くしかない」と

そう話してくれた山崎さん。商店「竹のいえ」には現在、およそ400点の食料品や雑貨、お土産品などが取り揃えられている。時には自分で潜って捕ってきた魚も販売するのだとか。

「商品は御問屋やネット通販で仕入れるのが主です。取り引きしてもらえない問屋さんが限られているうえ、仕入れる量が少ないので、ネット通販の方が安い商品も多いんです。ただ、それではお客さんと同じ値段で購入できてしまうので、複数のサイトをチェックし、なるべく安いところから仕入れています」

店構えは店名の通り、竹がふんだんに使われている。島で何かを作ると、ほとんどのものを

島外から調達するため、運送コストや人件費が跳ね上がってしまう。竹を使ったのは、無駄な運送コストや材料費を抑えるためと、なるべく島の素材を生かして竹島らしいお店にしたかったから。

「竹を使うことで、荒れた竹林を整備することもできました。島全体を覆うほどの竹の活用は大きな課題の一つなので、店の壁だけでなく外のベンチなどにも使っています」

開店までの資金繰りは、国境離島向けの補助金を活用。初めてのことで、設計士や工務店、役場との交渉がうまくいかずに苦労したという。開店直後は物珍しきで売り上げが多かったものの、その後どうなるかを懸念していた山崎さん。しかしふたを開けてみれば、2年目の目標額を初月で達成した。

「勝因の一つは、予定より大幅に商品を仕入れたことです。二つ目は、島みんなが想定していたよりお店を利用してくれたこと」

今後長く続けていくため、観光客用の民泊を開始する予定。村おこしボランティアの受け入れも積極的に行っており、彼らには「竹のいえ」で夜間、スナックの営業も始めてもらっ



3 店の面積は約23㎡。食料品、雑貨、服飾品などが並ぶ。島民はもちろん、土産物目当ての観光客にも立ち寄ってほしいとのこと。4 山崎晋作さんと3歳になる息子さん。5 外には竹で作ったベンチがある。「お客さん同士が交流できる空間として利用してほしい」と山崎さんは言う。



ているという。「これまでもいろいろな職種を転々としていて、昔から特定の職業に対する固執がないんです。島の中でできることは、お店以外にもいろいろ取り組んでいきたいと思っています」

お店を始める際、「ただ物を売るだけではなく、人が集まる場所」にして、少しでも島の楽しみを増やしたかったという山崎さん。その思いは、順調にかたちになっているようだ。

(黒田隆憲)